



第12回 23区消費者団体活動情報交流会 報告

「日本の農業を考える」 ～消費者として農家とどう関わっていくか～



日時:2025年11月17日(火)10:30～12:30
会場:石神井公園区民交流センター3階大会議室 参加者: 33名
主催:23区消費者団体活動情報交流会実行委員会
協賛:東京都消費者月間協賛事業



司会:日高元子さん
東京都生活協同組合連合会

開会挨拶 川端 法子さん 練馬区消費生活センター運営連絡会



2014年から始まった23区交流会も今回で12回目となりました。ここ数年、食に関するテーマで開催し、昨年は、日本の食料安全保障の問題や農業問題について学びました。今年度は、より私たちに身近な都市農業について、練馬区で農業をされている白石さんから、農家を応援する仕組みについて、東都生協の松村さんからお話いただきます。グループで話し合い交流する時間もありますので、充実した時間になればと思っています。

「都市農業から我が国農業を考える」白石 好孝氏 白石農園 代表



練馬区都市農業の現状と役割

練馬区の都市農業は、23区内農地の約4割を占め、都心近郊の貴重な食料生産拠点です。戦後の急速な都市化の中で、農地は半減しましたが、白石農園をはじめとする農家は新たな価値を創出しています。特に、農家が運営する「農業体験農園(練馬方式)」、食育、農福連携、マルシェなど多岐にわたる活動を展開しています。

日本農業が抱える構造的課題と米価低迷

日本の食料自給率は先進国で最低水準にあり(約30%台)、その背景には戦後から続く構造的な問題があります。特に、第二次世界大戦後の農地解放や米の自由化は、小規模農家の競争力を削ぎました。さらに、約20年続いた米価の長期低迷は、平均的な農家経営を赤字化させ、農家の80%が兼業という状況を生みました。日本の食を支える基幹的農家が経営を維持するには、現状より高い適正米価が必要であり、生産基盤の崩壊を防ぐための政策的・国民的理解が必要です。

農業の価値と意識改革の必要性

経済成長を優先した結果、農業が軽視され、生産者と消費者の距離が遠くなりました。農業は「自然と命を慈しみ、生きる糧を生み出す素晴らしい仕事」とであるという価値観を日本全体で共有し、適切な価格で農産物を購入することで、農家の後継者育成と農業の合理化が進みます。「作る人」と「食べる人」の精神的なつながりを回復させることが、持続可能な我が国農業の鍵となります。

「農家を応援する仕組み」松村 奈穂子氏 東都生協 商品部 農産グループ



食べる約束と作る約束を結ぶ「登録商品」制度

東都生協は100%産直にこだわり、産地と栽培計画を共有しています。「登録商品」は、組合員の注文を事前に確定し、産地が数量を予測できるため、安定出荷が再生産へつながります。若手メンバーによる「百年トマト」は、予測を大幅に超える登録を集め、組合員の生産者カードを通じた応援メッセージが産地を支える成功事例となりました。

資金的な支援による持続可能な生産の応援

資金面でも生産者を応援する取り組みがあります。過去の「土づくり基金」の貸付実績に加え、現在は組合員の募金で有機米産地へ除草機を贈る「アイガモロボ応援隊」を実施したり、「未来につなぐみかんの木」で苗木代・若木の管理費を支援するなど、生産者と組合員の交流を深めています。

消費者と産地が協力する取り組み

家庭でできる労働力支援として、根切り作業を省いた「根付き玉ねぎ」を企画し、産地と消費者の双方にメリットを提供。また、産地の課題解決のため「産直未来創造推進担当」を新設し、規格外品も利用する「畑まるっと産直にんじん」など、次世代の持続可能な産直モデルを模索・検討しています。

閉会挨拶 海老澤 恵子さん 中野区消費者団体連絡会



日本の食料自給率が低下する中、食料問題は消費者が「自分ごと」として関わるべき課題です。できることは、まず農業の現状と生産者を知ること、そして「国産国消」を実践することです。東都生協のような協同組合の支援活動への参加も重要です。白石様の練馬の事例は、市民参加による農業の活力を示しました。消費者としてこれからもさらに農業に関心を持ちながら、自分たちの食を安定的に手に入れるために活動していきたいです。私もお手伝いしたいと思います。本日はありがとうございました。